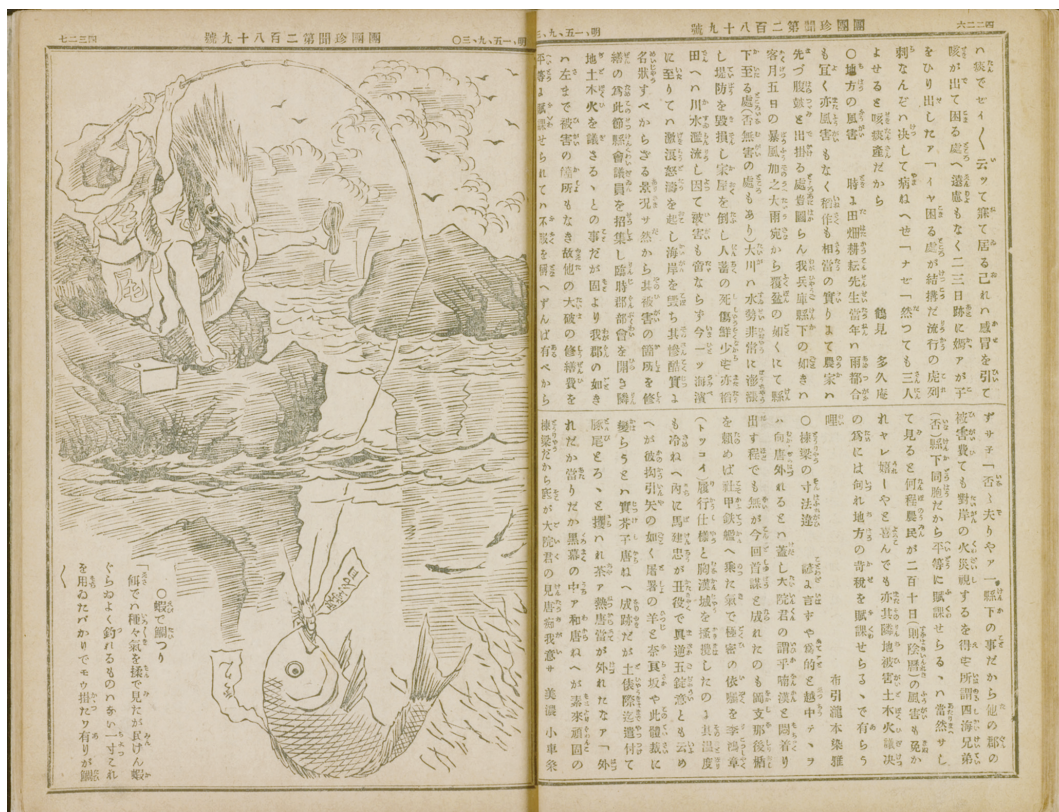


社会情報研究資料センターニュース

第22号 (2012.3月)

目次	高度アーカイブ化事業の概要と研究者資料のアーカイブズ …………… 研谷 紀 夫	1
	小野秀雄関係資料のアーカイブと展示・コレクション活用の問題点と意義	
	…………… 玉井建也・福重旨乃・添野勉・山村真紀	11
	センター情報……………	15



(小野秀雄関係資料 団団珍聞)

高度アーカイブ化事業の概要と 研究者資料のアーカイブズ

研 谷 紀 夫

1. 高度アーカイブ化事業

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター（以下資料センター）は1964年1月に、東京大学新聞研究所と総合図書館がそれぞれ所蔵していた新聞資料を集中的に管理利用する目的で設置された、新聞研究所附属「プレスセンター」をその起源とする。その後、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組され、同時に附属施設の「新聞資料センター」は「情報メディア研究資料センター」に、さらに2004年4月大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究が統合し、附属施設は「社会情報研究資料センター」に改称した¹。

情報学環境の附属施設となった資料センターでは2007年より、当時の馬場章センター長（大学院情報学環教授）によって資料の閲覧環境の改善を目的とした「高度アーカイブ化事業」が開始され、センター施設の（1）利便性・公開性の向上、（2）既存のアナログアーカイブのデジタル化、（3）劣化マイクロフィルムの救済、（4）新規 Digital Cultural Heritage の構築、（5）情報ネットワークの構築5つを柱とした。これらの事業の（4）における業務の中で、一つの柱となったのは、センター及び図書室に保管されてきた、研究者資料のアーカイブズの構築である。

本「高度アーカイブ化事業」により社会情報研究資料センターが取り扱う対象資料は、従来の新聞資料に留まらず、雑誌や写真など、幅広いメディア資料へと拡大した。また、資料の受入・整理・配架・閲覧・保存という一貫したプロセスを確立するために（1）整理保存機能の高度化、（2）利活用機能の高度化、（3）教育研究機能の高度化、（4）情報化アーカイブ機能全般の高度化に重点に事業を行ってきた。

これらの結果として、デジタル化スタジオの整備、収蔵庫の整備、資料閲覧室の整備、展示室の整備が終了する他、デジタル化に関する手順を示した「文化資源のデジタ

ル化に関するハンドブック」²、「小野秀雄関係資料総合目録」と「坪井正五郎関係資料総合目録」が公刊され、資料目録と一部の画像を掲載する Digital Cultural Heritage が公開される。

2. 研究者資料のアーカイブズ

2.1 研究者資料の概要

前述した「高度アーカイブ化事業」で扱った研究者資料とは、「主に学術・研究に従事した者が、研究及び研究と付随する活動の中で、作成、収集された資料」と定義する。資料センターでは、2004年度から2008年度までに行われた21世紀COEプロジェクト³で整理を行った、坪井正五郎資料が移管され、また資料センターと連携する図書室のロッカーには本大学院の母体の一つである、新聞研究所の創設者である小野秀雄に関する資料が未整理のまま残されていた。近年では、日本でもアーカイブズ学に関する研究などが進展しているが、大学においては、研究者が日々資料を蓄積し、その研究者が退職、もしくは死去した時に、それらの資料をどのように扱うかが、大きな課題となってきた。本事業においても、こうした背景を踏まえながら、坪井正五郎資料と小野秀雄資料を対象とした、研究者資料のアーカイブズの構築に取り組んだ。本稿では「高度アーカイブ化事業」で取り扱った坪井正五郎資料と小野秀雄資料の両者を比較しながら考察する⁴。

³ 21世紀COE次世代ユビキタス情報社会基盤の形成：<http://www.ubinsoc.org/21stcoe/>

⁴ 本稿は以下の論文を本センターニュース向けに一部を改稿した論考である。また執筆にあたっては、玉井建也研究員が「2.3」と「3.4」について一部加筆修正を行った。

研谷紀夫、高度アーカイブ化事業の概要と研究者資料のアーカイブズ、高度アーカイブ化事業報告書、東京大学大学院情報学環 社会情報研究資料センター、2012

研谷紀夫、高度アーカイブ化事業と研究者資料のアーカイブズ、シンポジウム研究者資料のアーカイブズ予稿集、pp51-57、東京大学大学院情報学環 社会情報研究資料センター、2011

¹ 社会情報研究資料センター、UT3 情報学環収蔵資料［第一幕］小野秀雄コレクションと坪井家寄託資料、2008

² 社会情報研究資料センター、<http://www.center.iii.u-tokyo.ac.jp/handbook> (Accessed:2012-02-20)

2.2 坪井正五郎資料の概要

坪井正五郎は明治時代の人類学者であり、その学問は人類学に留まらず、民族学、民俗学、考古学など幅広い範囲に渡っている。坪井正五郎の資料は、その祖父で蘭方医であった、坪井信道（1795-1848）、父であり将軍奥医師であった信良（1823-1904）などの資料とともに、岩石学者であった子息坪井誠太郎（1893-1986）の旧宅に保存されていた。情報学環・学際情報学府の馬場章研究室では、2003年から04年にかけて坪井正五郎と関わる研究・調査の一環として、坪井家に残る資料についての調査を行った。その結果、坪井家に、子息である坪井誠太郎が整理をした正五郎に関する資料が多数残されていることが判明した。その後、坪井正五郎に関するプロジェクトは21世紀COEのプロジェクトに組み込まれ、同事業において、坪井家四人の資料を全て東京大学へ移管するとともに、坪井正五郎の資料に焦点をあてた整理と保存が行われた⁵。

2.3 小野秀雄資料

小野秀雄は1885（明治18）年、滋賀県に生まれ、その後1906（明治39）年に東京帝国大学文科大学に入学しドイツ文学を研究、卒業後に萬朝報に入社し1915（大正4）年退社し、その2年後に東京日日新聞に入社した。この前後より瓦版などの収集に取り掛かりはじめ1919（大正8）年には新聞社に在職したまま東京帝国大学大学院に入学し、新聞研究に取り掛かり始める。そして1921（大正

11）年には『日本新聞発達史』を発刊し、その後は吉野作造、石井研堂らとともに明治文化研究会を設立、1925（大正15）年には東京帝国大学文学部志願講師として世界新聞史の講義を行い1929（昭和4）年には東京帝国大学文学部に新聞研究室が開設されたのを受けて小野が指導を行う。これと同時に上智大学、明治大学の教授を歴任し、戦後には定年により東京帝国大学講師を退任しているにも関わらず、東京大学新聞研究所設立により特例として1949（昭和24）年に東京大学教授、新聞研究所長に就任する。また後に日本新聞学会初代会長に就任、新聞文化賞受賞もしている。

2.4 坪井資料小野資料の相違点

坪井資料と小野資料は、対象者の学問領域や成立した時期などに差があり、一概に比較することは難しいが、両者においては複数の相違点がある。

まず、共通点としては（1）紙資料が多く、それ以外の資料は少数である点、（2）ノート、草稿、メモなど手書きの資料が多く含まれる点、（3）書籍や雑誌が多く含まれる点、（4）既に第三者による整理が終了していたので、本人による資料の区分や区分けなどは不明である点、などである。

この中で、（1）については、小野は主に文献や新聞・雑誌を対象として研究をしていたため、紙資料が大部分を占める。一方の坪井は、人類学、考古学、民俗学などの幅広い範囲で、活躍をしていたが、発掘・採取資料などは子孫



図1 坪井正五郎関係資料

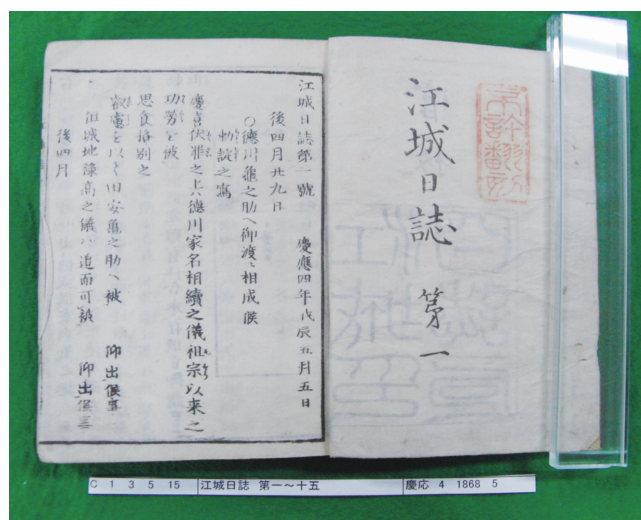


図2 小野秀雄関係資料に含まれる幕末明治期の新聞

⁵ 研谷紀夫 馬場章，建築資料を対象としたリアル・デジタルアーカイブの構築，アーカイブズ学研究，日本アーカイブズ学会，No.4，pp50-70，2006

宅には残されておらず、立体物の資料としては、服や彼自身のデスマスクのみであり、その多くは紙資料であった。また、(2)と(3)については、両者とも、明治以降に成立した資料であるため、文字や絵などを書き残した文書資料としても、ノート・メモ帳・洋紙・半紙・スケッチブック・帳面・便箋など様々な種類の形式で残されている。さらに、それだけではなく、研究者である点から、両者とも論文誌や関連する記事が掲載された新聞や雑誌などが多い。また(4)については、坪井は子息の坪井誠太郎によって、一方の小野資料は小野の自宅から大学に移り、さらにロッカーなどに整理される過程で、自宅における資料構造は変化しており、本人による資料秩序は見出すことはできない。

一方で異なる点としては、(1)資料受け入れの理由や経緯が異なる点があげられる。小野は当時の新聞研究所の創設者であり、機関全体の研究内容と深く関わる資料を所有していたという理由から、図書室の職員を中心として、資料の移管が行われた。一方の坪井は、大学院の研究室における研究・調査プロジェクトの一環として、資料の移管が行われた。またその他には、(2)小野秀雄の資料は戦後の資料の比率が大きい点、(3)小野秀雄資料については、新聞・雑誌の比率が極めて大きい点、(4)坪井は書簡類が少数であるのに対して、小野は葉書と絵葉書などを含めて書簡類が多い点、(5)坪井は子孫宅から直接移管されたのに対して、小野は一度東京大学に移管された後に、教員と図書室の中で秩序化され、さらに部分的な資料のみが整理保存された点、(6)坪井は全て一つの資料群であるのに対して、小野は前述の整理過程より、絵錦新聞・かわら版とその他資料と資料群が分かれている点、などである。

特に新聞研究者であった小野の資料においては、(2)の傾向が顕著である点を指摘することができ、資料群の一定の部分が、公刊された新聞、雑誌などによって占められている。

このような相違点がある資料であるが、いずれの資料においても、(Ⅰ)出所と現況記録の取得、(Ⅱ)資料の整理、(Ⅲ)資料のデジタル化、(Ⅳ)Digital Cultural Heritageへの格納といった過程を経ている。次項において、これらの過程について両者を比較対象しながら考察する。

3. 出所と現状記録調査

3.1 坪井正五郎資料の過程

前述した坪井家関係資料の整理は、高度アーカイブ化事業が開始される前より、東京大学大学院情報学環の馬場章研究室が中心となって行った。馬場研究室では、馬場章助教授(当時)自身が、三重県の西家文書調査⁶など、様々な歴史史料の調査に取り込んでおり、資料調査の方法としては「現状記録法」を一つの柱としていた。現状記録法とは、資料が保存されていた環境や配置に関する情報を詳細に記録する方法であり、資料が保存施設などに移管された後も、資料調査の時点での「現状」を参照できることを可能とする記録法である。現状記録を重視した史料調査の方法は、1980年代より、国文学研究資料館史料館による「文書館学的記録史料整理論」などを契機として始まり、茨城史料調査会、伊奈町結城家文書整理、北区史編纂調査会、北海道立文書館、三重県近世史料調査会、房総史料調査会、埼玉県地域史料保存活用連絡協議会、牛久市史編纂委員会近世史部会、甲州史料調査会、千葉県文書館などで実施されてきている⁷。元来アーカイブズにおける資料は、出所原則、原秩序保存、原形保存が重要な原則となっているが、現状記録法は調査記録をこれらの原則に近づける方法の一つとして、実践され、特に近世史の分野において実践と事例報告がなされている⁸。

安藤(1993)は記録史料調査の一連のプロセスを図1のように示しているが、現状記録法は、主に「所在・概要調査」「構造分析」「多角的利用」の三点と重要な関わりを持つ⁹。資料の「所在・概要調査」においては、資料の来歴や所在を確認し、さらに「構造分析」においては、現状記録に基づいた資料保存の階層関係を把握する構造分析を行う。そして、資料の内容とともに、構造などからも資料を検索することのできる多様な検索手段を提供して「多目的利用」ができるようにすることが必要である。

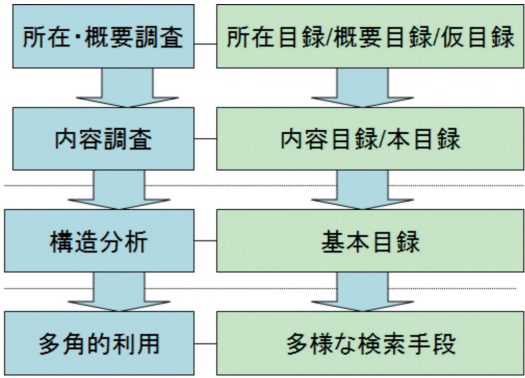
⁶ 三重県生活部文化課, 三重県史料調査報告書別冊 三重県南牟婁郡紀和町 西家文書調査報告書, 1999

⁷ 吉田伸之, 芦田伸一, 現状記録論をめぐって, 近世房総地域史研究, 東京大学出版会, 1993, pp291-314

青木美智男, 日本近世史研究と古文書, 歴史科学への道(上), 校倉書房, 1976, pp272-303

西田かほる, 甲州史料調査会の活動について, 地方史研究 246, 1993, pp54-66

⁹ 三重県生活部文化課, 三重県史料調査報告書別冊 三重県南牟婁郡紀和町 西家文書調査報告書, 1999



(安藤正人 記録史料調査の理論と方法-現状と課題
- 掲載の概念を著者が一部変更)

図3 記録資料調査のフロー

(安藤正人『記録史料調査の理論と方法-現状と課題』より)

このような特徴と経緯を持つ現状記録法は、これまでに主に近世資料に対して施されてきた記録法である。そのため、明治以降の近現代期の資料に対する現状記録については、その実践例が少数である。よって、本資料調査においては、近世期の資料に適応させてきた現状記録法を基本としつつも、近代以降の資料の特徴を踏まえた上で、現状記録を取得することとした。

3.2 坪井家関係資料と現状記録法

坪井家関係資料における現状記録は主に大きく分けて二つに分けることができる。一つは、坪井邸における資料の保存状態に関する現状記録であり、二点目は、これらの資料を大学に移動し、各資料群における資料の状態の記録を行う点である¹⁰。両調査において対象となった坪井家関係資料は、表1に示されたような構成である。

坪井家資料は前述したように、東京都下に存在した、坪井誠太郎の旧宅に保存されていた。総点数は5000点余りで、草稿、メモ、スケッチ、書籍、日記・手帳、論文切り抜き、新聞・雑誌、書簡・葉書、写真、などを中心とする資料である。同邸には、坪井家四代の資料が保存されており、家全体が、坪井家に関する資料の「収蔵庫」の役割を果たしており、調査グループではこれらの構成を現状記録法に則って記した。

現状記録法の基本は、資料群を構造化して捉え、大きな枠組みの資料群から、個別の資料までを階層構造に従っ

表1 坪井家資料の箱番号と内容

箱番号	内容	受入元
NO1	靴 坪井誠太郎関連	東京都内 誠太郎旧宅
NO2	坪井信良・信道関連	東京都内 誠太郎旧宅
NO3	坪井正五郎関連	東京都内 誠太郎旧宅
NO4	坪井正五郎関連	東京都内 誠太郎旧宅
NO5	坪井正五郎・誠太郎関連	東京都内 誠太郎旧宅
NO6	坪井信良・信道関連	世田谷区 正道氏宅

他

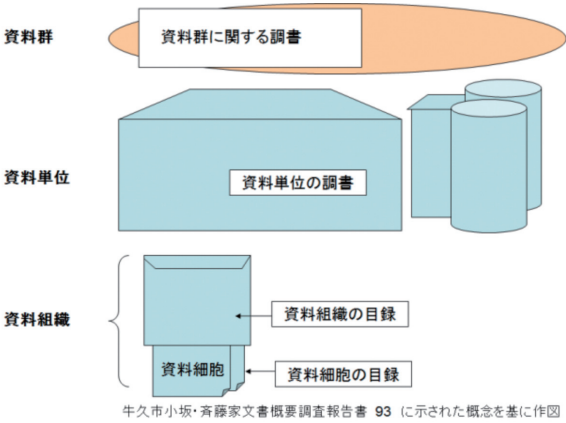


図4 牛久小坂・斎藤家文書の資料構造
(『牛久市小坂・斎藤家文書概要調査報告書』より)

て、記録していく点にある。図4は牛久市の小坂斎藤家文書の構造に関する枠組みであるが、資料の全体を「資料群」「資料単位」「資料組織」「資料細胞」という構成で捉えて構成している¹¹。

このような構造化は、千葉県史料研究財団による安房郡丸山町石堂謹司家文書など、その他の現状記録法による調査に適応されている¹²。これらを踏まえて、坪井家関係資料については、図5に示されるような構成で現状記録を行った。資料群の最も大きな単位は坪井家関係資料を収蔵していた、「坪井誠太郎邸」と捉え、その下に邸宅の各部屋にアルファベットの記号を付与し、記録した。

各資料が、坪井邸のどの位置でどのような形でそれらの資料が保存されてきたかは、各資料の坪井家での位置づけ、それぞれの資料同士の相関関係を把握する上での一つの尺度となると考えられる。そのため、調査では、建物構

¹¹ 牛久市史編纂委員会近世史部会，牛久市小坂・斎藤家文書概要調査報告書，1983

¹² 千葉県史料研究財団，千葉県地域史料現状記録調査報告書安房郡丸山町石堂謹司家文書，1995
町石堂謹司家文書，1995

¹⁰ 注5と一緒

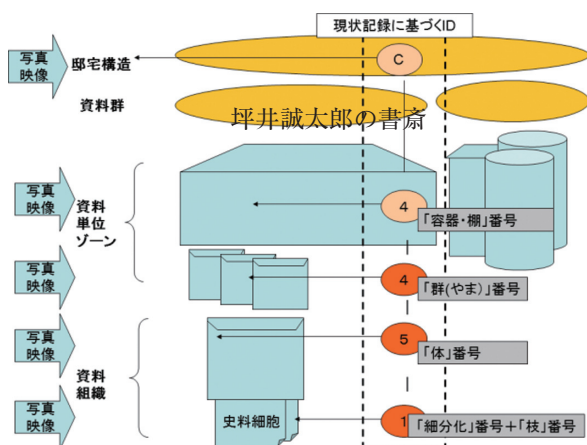


図5 坪井家関係資料の資料構造

[illegible]

図7 調査記録用紙



図6 坪井誠太郎の書斎

造の記録を行なうとともに、建物の中でどの坪井家資料がどのような位置に保存されていたかについて記録を行った。

特に、坪井誠太郎に関する調査・研究をする場合、同氏が主に研究活動を行なった書斎などの空間情報を把握することが極めて重要である。書斎の壁は図6に示されるように、全体が本棚となっており、各資料の位置関係は同氏の考えた資料の関係性、秩序感を反映していると考えられる。そのため、書斎の中の構造と、どの位置にどのような資料が保存されていたかを図7のような調査用紙に記録した¹³。

坪井邸における現状記録の方法については、坪井邸の各部屋と各部分に ID を付与し、さらに、棚や資料群ごとに図 8 のように子 ID を付与した。その上で ID タグを各位置において、資料の保存の概況を写真ならびにビデオにおいて撮影を行った。ビデオの撮影に際しては資料の保存状況についてナレーションなどを適宜入れながら記録を取得



図 8 坪井誠太郎の研究機の引き出しと ID 図

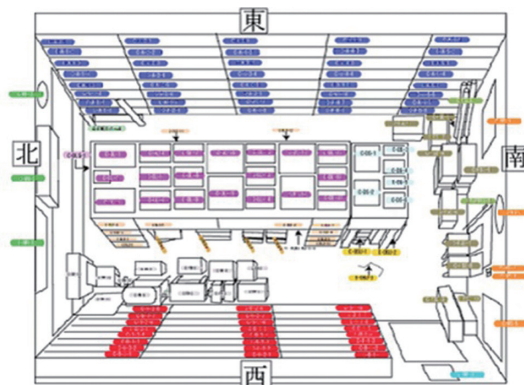


図9 書齋のID図の概要

した。さらに、図 9 に示されるように各部屋と各ゾーンの ID 状況をイラストで記録した。

3.3 大学への移管と調査

坪井誠太郎郎において現状記録を行った資料は、2004
年の夏に東京大学に移管された。移管された資料は、「取

¹³ 研谷紀夫, デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合
化モデルの研究, 勉誠出版, 2009



図10 資料の「山（やま）」の単位



図11 資料の「山（やま）」単位の撮影

り上げ」と呼ばれる資料のグループ分けと、図10や図11に示されるような、写真と映像による記録を行った。

目録情報を付与する場合、近現代資料は近世資料以上に、多様なフォーマットを有している。例えば、ノート、メモ、葉書、封筒、便箋、原稿用紙、写真、書籍といったように様々なフォーマットの記述媒体があり、これらが置かれていた状態、構成のされ方も多様である。例えば、封筒には写真、原稿用紙、メモ、書籍など様々な物品を封入することが可能であり、書籍やノートの中に原稿用紙や写真などが挟まれていたケースもある。また、様々な資料が複雑に複合し、一体化されている資料などもある。しかし、近世資料と同様に多くの資料が、袋や紐などで束ねられ、何らかの包摂関係で資料が構成されている。そのため、近代資料についても、資料の包摂関係を最も重視し、入れ子構造の観点から、資料のIDを付与し、各資料の位置関係を中心に記録した。

これを図5に則して説明すると、シリーズの下にさらに小さいグループを設け、資料整理の基準となる単位に分けた。そして、このグループのさらに下にあるアイテムを対象として資料の調査を行った。

次に、坪井信良・信道、坪井正五郎、坪井誠太郎と資料群を分け、それぞれの資料群が保存されている「容器・棚」などに応じてシリーズ番号を付与し、「山（やま）」としてとらえ、さらに、その下の個別の資料の単位であり、図2の「組織」にあたる単位を本プロジェクトでは「体（たい）」という単位で呼称して番号を付与した。さらにその中に含まれる最少の資料単位であり、図5で「細胞」と示される資料単位へは、「細分化」番号を付与した。さらに、細かい単位がある場合は、「枝番号」として付与する。これらのID番号を見ることによって、資料の構造を把握で

きるようにした。

封筒を資料アイテムの一例としてあげると、第一に封筒と封筒の中に入った資料とを区別し、容器に付与された番号を付与する。しかし、封筒などの中にはさらに状が入っている場合や、書籍においても中にメモが入っている場合、複数に分けることができる。その場合は「体」番号の下に細分化番号まで付与する。例えば、「容器ID4」に入っている資料番号3の中にある5番目の封筒とその中に入っていた便箋にIDを付与すると以下のような内容になる。

封筒のID：4-3-5

4（容器・棚番号）－3（「山」番号）－5（「体」番号）

封筒内の状：4-3-5-1

4（容器・棚番号）－3（資料「山」番号）－5（資料「体」番号）－1（資料「細分化（細胞）」番号）

また、折り畳まれた状態の紙が二組以上ある場合や「ちらし」や「紐」など別の資料が入っている場合は、別の「細分化番号」を付与し、封筒や他の内容物とは区別をする。また、様々な資料が複合的に一体化しているような資料については、写真で撮影するとともに、スケッチを付与し、後日これらの構成について確認できるようにした。以上のような順番で、資料のIDを付与することによって、これらによって、資料の位置関係は概ね記録化された。これらのIDに基づいて作成された目録はエクセルに登録され、その後目録やデータベースに登録された。

3.4 小野秀雄資料の過程

小野秀雄の資料については、前述の坪井家資料のアーカイブ化の方法論を基礎として資料整理を行った。小野は新聞研究を進める中で、幕末や明治の新聞、海外などの新聞を収集し、自宅に保存していた。これらの資料は、小野の死後、小野自身が作成したノートや草稿、書簡などとともに当時の新聞研究所に寄贈され、新聞研究所内図書室などのスペースなどに分散して保管されていた。以上のような組織変遷の中で、小野秀雄氏関連資料が寄贈されたのを受けて、資料群のうち瓦版や錦絵のみ 1000 点余りを先行して整理・保存を行っている。その成果は東京大学社会情報研究所創立 50 周年記念特別展示・東京大学コレクション IX「ニュースの誕生——かわら版と新聞錦絵の情報世界」展として 1999 年 10 月 8 日から 12 月 12 日にかけて東京大学総合研究博物館にて公開された¹⁴。

社会情報研究資料センターでは高度アーカイブ化事業として坪井正五郎資料・小野秀雄資料の整理・目録化の作業を行っている。歴史学・資料学といった分野を背景にしながら、これら歴史資料を取り扱うだけでなく、映像資料や映像文化に対応すべくデジタル化作業および Digital Cultural Heritage 構築の作業も進めている。この中で小野秀雄資料は歴史資料の基幹として捉えられており、日々、整理作業が続けられている。

小野秀雄関連資料の整理作業はまず全体像の把握から行われた。目算によって 1 万 6000 点はあることが分かったが、その資料群が A から H に至るまで分散していて保存されていた。この英数字の分類は小野秀雄関連資料を小野家から受け入れる際、当時の司書が厳密ではないが内容に準じて分類化し、それぞれ保管していったことに依拠している。したがって、残念ながら資料センター側として小野家がどのようにして保管していたかといった把握作業は行われていない。これら 1 万 6000 点余りの資料を、既に先行して整理・保存作業が行われていた坪井家資料の作業方法に依拠しながら進めることになる。特にメタデータの付与作業は国際基準である Dublin Core¹⁵ を基礎としながらも、歴史資料を取り扱うという点を加味しながらの作業と

なった。また、これらメタデータ関係作業と同時にデジタル化作業および Digital Cultural Heritage 構築の作業も進められた。

場所は、広い範囲に渡り、複数の資料群が混在している所は、小野の資料であるか否かを判断することが難しく、当時の図書係りの担当者にヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は、当時の図書掛の職員の他、小野秀雄資料の調査と整理に関わった研究者、小野秀雄と生前親しくしていた研究者などの 5 名に対して行われた。

3.5 資料の構造化とメタデータの付与

坪井家資料の場合は、全ての資料を一つのプロジェクトで整理することが難しいため、坪井家四代の各人物に応じて、資料を整理し、公開することとした。前述の 21 世紀 COE プロジェクトにおいては、坪井正五郎のみを対象に行ったが、坪井家正五郎については、正五郎の資料が収納された箱別に ID が付与されており、箱の ID に基づいて各資料の ID も付与されている。

一方の、小野秀雄資料については、本プロジェクトの調査時には、錦絵新聞とかわら版は、既に 7 階の展示室に移管されていたが、それ以外の資料は、図書室の様々な場所に散在する形であった。そのため、図書室に保存されている状態を平面図に対応させて入力した。

これらの資料内容のジャンルとしては、坪井正五郎と小野秀雄で以下のようなカテゴリーで整理を行った。両者は時代的な変化があったが両方において、共通のカテゴリーで整理を行った。その構成は、(1) 原稿 (2) メモ / 草稿 / スケッチ (3) 日記 / 日誌 / 手帳 (4) 書簡 / 葉書 (5) 写真 (6) 絵画 / 版画 (7) 私家本 / 私家雑誌 (8) 一般公刊物 (本・雑誌など・地図) (9) 立体物の資料 (塑像 / 玩具 / 文房具 / 家具) (10) その他である。

また、両プロジェクトではこれらの様々な資料に付与するメタデータエレメントセットとしては、Dublin Core を中心とするメタデータのエレメントセットを採用することとした。Dublin Core の要素の中で「title: 表題」「creator: 作成者」「date: 作成年」「publisher: 出版者」などの必要最低限のエレメントセットとこれに加えて、エクステンションを加えたメタデータで構成されている。Dublin Core が、日本で採用されている実例としてはアジア歴史資料センターなどにおける近現代行政文書への付与や、複

¹⁴ 木下直之、吉見 俊哉、ニュースの誕生—かわら版と新聞錦絵の情報世界、東京大学総合研究博物館、1999

¹⁵ Dublin Core: <http://www.dublincore.org> (Accessed:2012-02-20)

数の関連機関などのデータベースを共通エレメントでマッピングする規格¹⁶としても用いられている。そのため坪井家資料のメタデータにも ①多様な資源に適用できるシンプルさ、②国際標準として他のデータベースとのデータ交換などができる汎用性、の2点から Dublin Core を用いることにした。しかし、各資料はそれぞれの特性に応じて情報が生じるため、それらの情報はエクステンション情報として情報を入力することにした。

4. Digital Cultural Heritage への格納

4-1. 資料の撮影とデジタル化

社会情報研究資料センターでは、資料をデジタル化する、撮影所を設置し、そこで資料の撮影を行った。設備としては、カメラレンズの後ろに装着し、撮影したイメージをデジタル化させる機器として Phase One 社の Phase One P25 + を備え、資料の撮影を行った¹⁷。また、デジタルデータはアプリケーション Capture One を用いて RAW データを管理し、公開用の JPEG データを作成した。これらのデジタル化のフローに関しては、前述した「文化資源のデジタル化に関するハンドブック」で示されている。

4-2. 構築の概要

整理された資料は複数の資料を格納することのできる統合 Digital Cultural Heritage システムに登録された。この Digital Cultural Heritage では、坪井正五郎と小野秀



図 12 資料撮影の様子

¹⁶ 注5と一緒
研谷紀夫 馬場章, 近現代個人資料へのメタデータ付与の実践と検証, じんもんこん 2004 論文集, 情報処理学会, pp91-98, 2004
アジア歴史資料センター: <http://www.jacar.go.jp/> (Accessed: 2012-03-20)

¹⁷ <http://www.phaseone.com/> (Accessed: 2012-02-20)

雄を中心とする資料を格納しているが、それは、資料を一覧できる、「資料一覧」や「地図・年表」による検索、「文字位置検索」によって資料を検索することが可能である。資料一覧では、資料の構造情報に基づいて、ツリーが形成され、ツリーより資料を選択する。選択された資料は、図 13 に示されるようなブラウザで閲覧することが可能である。

またこれらに加えて「トピックマップ検索」を設けている。「トピックマップ」検索は、研究者と関係する人物や



図 13 資料の表示

人名	タイトル	
	人名	小谷部全一郎 鳥居龍蔵
役職・職業名	タイトル	
	概要	
関係地	タイトル	
	地域	140.5221946,42.392443
	地域名	洞爺湖町
	タイトル	

図 14 メタデータに埋め込まれたトピック

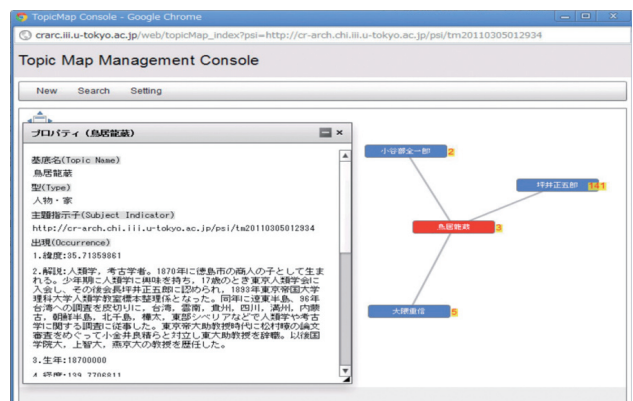


図 15 トピックマップの表示

事物などの関係性をグラフで表現しており、それらの関係を参照することができる。

具体的には、「文字一致検索」などから各資料ページに到達した場合、図 15 に示されるように各資料のメタデータに人名や地名のトピックが埋め込まれている。これをクリックすると、各関係情報が表示される。また図 13 のように各人物に関する詳細情報も各関係情報が表示される。

具体例を示せば、例えば「坪井正五郎資料」に含まれる資料を選択すると関連人名として、弟子であった「鳥居龍藏 (1870-1953)」の名が入力されている。これらをクリックすると、グラフ上で鳥居と坪井との関係や、その他の人名や地名などとの関係が表示される。これは、坪井とその他の事物との関係などを参照しながら、資料を閲覧することを目的とした機能である。本 Digital Cultural Heritage は坪井だけではなく、小野秀雄資料などについても、2011 年度末の本事業の終了時までには格納され、坪井正五郎資料とともに一般公開される予定である¹⁸。

5. 収蔵庫の整備と資料の保存

前項までの概要によって整理した資料は、本事業によって整備した収蔵庫に保存された。また、修繕が必要な資料については補修を行った。また、全ての資料は中性質紙の箱に収蔵され、保管された。これらにより、これまで必ずしも保存状態が良好ではなかった資料の保存体制の整備が進行した。これらの資料は、本事業で整備した、閲覧室などをを用いることで、希望者が閲覧することが可能となる設備が整えられた。



図 16 小野・坪井資料が保存される収蔵庫



図 17 整備された閲覧室

6. まとめ

本稿では、高度アーカイブ化事業の概要に沿って、坪井正五郎資料と小野秀雄資料を比較しながら考察したが、前述したように、坪井家資料が本学に受け入れた経緯と、小野資料が受け入れられた経緯は異なっている。前者は研究室のプロジェクトとして、大学に移管され、後者は大学と縁のある人物として、死後自宅から移管された資料である。大学という機関にとって、研究者の資料を受け入れる契機としては後者の方が一般的であると言えるが、前者の例やその他の例も考えられる。

研究者の資料が永続的に大学や図書館、博物館、文書館に受け継がれるか否かは、その組織の研究教育活動において、その研究者の資料がどの程度、有意義に活用することができるかという点に重点があると言える。

また、研究者資料と定義した場合、研究者が遺した資料の評価・選別が難しい作業となるが、本プロジェクトでは、坪井家資料の場合は子息によってある程度の整理がなされており、また小野秀雄資料の場合も、当時の図書館の職員によって、評価・選別がなされている。坪井誠太郎資料の場合は、東京大学のグループによって評価・選別がなされたが、生活用品を除く、研究と関連する全ての資料を移送した。その上で、現在科学史の専門家に調査をうけている。そのため、本プロジェクトでは、本格的な評価・選別作業を行っていない。

研究者の資料の評価・選別は専門のスタッフでも難しく、また資料を体系的に結び付けていくためには、資料群のまとまった単位での保存が必要であるが、収蔵庫のスペースなどの問題がある。そのため中間的な収蔵庫を設け、資料を網羅的に収蔵した上で、その後の研究調査などを経て、資料の評価・選別などを行うことが求められる。

¹⁸ 東京大学社会情報研究資料センター <http://www.center.iii.u-tokyo.ac.jp/>
(Accessed:2012-02-20)

そして、評価・選別を行った場合は、各プロジェクトにおいては、どのような基準で、どのような資料を評価・選別したかについての記録を残していくことが必要であろう。

また、資料の現状は、本人によって秩序化されている例もあるが、その後の遺族などによって整理されている例もある。これらの過程を記録するとともに、なるべく現状の記録を残しておく必要があるだろう。また、自宅ではなく、大学の図書室や関連施設に収蔵されている例もあるが、これらについても、教員や職員などによってどのような経緯で資料が移管され、どの範囲までが該当資料であるかについて記録を残し、継承して行く必要がある。

また、これらの記録された資料については、資料が成立された過程や、資料が保存されていた場所などに応じて構造化されるべきであり、それらは国際標準的な規定に応じて、構造化し、さらに記録を残していく必要がある。そしてこれらの情報は Digital Cultural Heritage などを利用して構造化された情報を残していくことが必要であろう。また、Digital Cultural Heritage においては、関係する人物や学術領域に対する知識・情報を得ることのできる情報を付与することによって、専門ではない閲覧者もその資料についての知識を得ることのできる機能も必要とされよう。

さらに、研究者資料のアーカイブズを残していく意義があるが、坪井正五郎に関しては、坪井が関わった遺跡の発掘地で行われている、郷土研究史研究や地域に関する企画などにあわせた、調査や展示の依頼が多い。坪井のよ

うな様々な地方と縁のある研究者は、大学や学会などの中央における活動だけではなく様々な地域の歴史や地域活動の視点から改めて見直される可能性が高い。よって、評価・選別に際しても、研究者の中心的な活動の視点から資料の評価・選別を行うのではなく、多様な活動の視点から、資料を評価していくことが必要であろう。

また、坪井自身の研究者や評伝の執筆を目的とする、調査依頼もあり、対象研究者の再評価や、評伝の執筆などに活用される例が考えられる。また、各学問史の見直しを行う場合においても、これらの資料は重要な資料を提供すると考えられる。そのため、個人としての関わり、関わった学問の歴史の見直し、対象研究者やその分野の再評価、さらに該当学問の初学者に対する教育素材などに必要な資料となるだろう。

また、研究者も、時代の様々な考えや影響の中で活動しているため、坪井においては人種に関する考え方や、小野については戦争協力などの問題の点に触れる資料などがある。また、それ以外でも、本人以外の個人情報などに触れる資料なども存在する。そのため、これらの課題に対処しながら、資料を公開していく必要がある。

また一方で、それらを保存するためには、スペースと、社会や機関の理解、後継の研究者が大学職員の理解などが必要になる。よって、これらの資料の継承のためには、対象研究者と関わる地域、関係する学会、所属した機関の教員ならびに職員などの理解を得て、総合的に残していく意義の理解と、活用をしていく整備が必要である。

小野秀雄関係資料のアーカイブと展示 —コレクション活用の問題点と意義—

玉井建也・福重旨乃・添野勉・山村真紀

1. はじめに

公的・私的を問わずアーカイブ活動は各機関・各人、様々な立場に依拠しながら行われている。そのような中で、個人のコレクションを機関がアーカイブすることの意義および問題点を考察していく。既に既存のアーカイブの方法では例えばマンガの収集・保存には適用することは非常に難しく、個々それぞれが状況に応じて活動せざるを得ないことが指摘されている（表 [1]、玉井・吉田 [2]）。その理由として一つには多くの分類の中の一つでしかないマンガのみを取り扱うことは取り扱う全ての事物が同一の分類となってしまうこと、そして活用できるアーカイブを行うためには少年漫画や青年漫画といった内容に依拠する分類や大きさや色、印刷様式など外観に依拠する分類など複層性を帯びた分類方法に成らざるを得ず、逆説的に他の資料群との連携し、活用されていくことが難しくなる点である。これと同様に特定の志向性を以て集められたコレクションをアーカイブ化していくことにおいて様々な問題点が浮かび上がってくることは必至であろう。そのような中で本発表では小野秀雄氏が収集・保存した資料群を、他資料も同様に収集・保存している社会情報研究資料センターにおいてどのように対応しているのかを事例としながら考察していく。

2. 社会情報研究資料センターにおける基礎的な活動

まず小野秀雄氏の紹介を行う。小野は明治 18 (1885) 年、滋賀県に生まれ、その後、明治 39 (1906) 年に東京帝国大学文科大学に入学しドイツ文学を研究、卒業後に萬朝報に入社し、大正 4 (1915) 年退社し、その 2 年後に東京日日新聞に入社した。この前後より瓦版などの収集に取り掛かりはじめ、大正 8 (1919) 年には新聞社に在職したまま東京帝国大学大学院に入学し、新聞研究に取り掛かり始める。そして大正 11 (1921) 年には『日本新聞発達史』を発刊し、その後は吉野作造、石井研堂らとともに明治文化研究会を設立、大正 15 (1925) 年には東京帝国大学文

学部志願講師として世界新聞史の講義を行い、昭和 4 (1929) 年には東京帝国大学文学部に新聞研究室が開設されたのを受けて小野が指導を行う。これと同時に上智大学、明治大学の教授を歴任し、戦後には定年により東京帝国大学講師を退任しているにも関わらず、東京大学新聞研究所設立により特例として昭和 24 (1949) 年に東京大学教授、新聞研究所長に就任する。また後に日本新聞学会初代会長に就任、新聞文化賞受賞もしている。

既述の東京大学新聞研究所に昭和 39 (1964) 年に開設された「プレスセンター」が現在の社会情報研究資料センターの出発点となっている。その後、昭和 42 (1967) 年に新聞研究所附属施設「新聞資料センター」となり、平成 4 (1992) 年に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるのを受けて「情報メディア研究資料センター」と改称、平成 16 (2004) 年に大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称した。

以上のような組織変遷の中で、小野秀雄氏関連資料が寄贈されたのを受けて、資料群のうち瓦版や錦絵のみ 1000 点余りを先行して整理・保存を行っている。その成果は東京大学社会情報研究所創立 50 周年記念特別展示・東京大学コレクション IX 「ニュースの誕生——かわら版と新聞錦絵の情報世界」展として 1999 年 10 月 8 日から 12 月 12 日にかけて東京大学総合研究博物館にて公開された（木下・吉見 [3]）。しかしながら、瓦版・錦絵以外の資料に関しては未整理の状態が続き、2010 年度・2011 年度の 2 年間で資料整理・保存活動が行われており、今年度中には目録・デジタルアーカイブの公開が予定されている。

社会情報研究資料センターでは高度アーカイブ化事業として坪井正五郎資料・小野秀雄資料の整理・目録化の作業を行っている。歴史学・資料学といった分野を背景にしながら、これら歴史資料を取り扱うだけではなく、映像資料や映像文化に対応すべくデジタル化作業およびデジタル・アーカイブ化の作業も進めている。この中で小野秀雄資料は歴史資料の基幹として捉えられており、日々、整理作業

が続けられている。

小野秀雄関連資料の整理作業はまず全体像の把握から行われた。目算によって1万6000点はあることが分かったが、その資料群がAからHに至るまで分散していて保存されていた。この英数字の分類は小野秀雄関連資料を小野家から受け入れる際、当時の司書が厳密ではないが内容に準じて分類化し、それぞれ保管していったことに依拠している。したがって、残念ながら資料センター側として小野家がどのようにして保管していたかといった把握作業は行われていない。これら1万6000点余りの資料を、既に先行して整理・保存作業が行われていた坪井家資料の作業方法に依拠しながら進めることになる。特にメタデータの付与作業は国際基準であるDublin Coreを基礎としながらも、歴史資料を取り扱うという点を加味しながらの作業となった。また、これらメタデータ関係作業と同時にデジタル化作業およびデジタル・アーカイブ化作業も進められた。

3. コレクションを展示するということ

小野秀雄関係資料については先述のように既に瓦版・錦絵については整理・公開が行われている。これらについては小野自身が『かわら版物語』を執筆しているように、古物収集的な活動に留まるだけでなく、学術的な志向性をもって整理されている（小野 [4]）。また一般的には視認性が豊かであり、展示活動に活用しやすい点も言えるであろう。したがって瓦版・錦絵については収集の際の志向性の明確さ、またその活用の容易さが指摘できる。しかしながら、小野個人が集めたものについて、また彼自身が所蔵しているもの全般については必ずしも同様のレベルでの判断は難しい。

既述のように小野自身は新聞研究の祖とも言うべき人物であることは間違いない。したがって彼自身が収集した資料群の多くを新聞が占めるのは当然であるが、その収集は決して一様ではない。

小野自身の新聞研究は新聞自体の収集活動からスタートしている。特に歴史研究から入ったがゆえに、収集家の助力を得たり、また小野自身が知人や識者を直接訪ね、実際の古い新聞の閲覧の許可を得たり、購入の交渉をしていた。これらの活動に関して小野自身は「新聞歴史の研究は、いわば先人未踏の地を開拓するようなものであるから、一日歩けば必ず一つの獲物があった」と記している（小野 [5], pp98）。開拓者であったがゆえに収集し、そ

の歴史的意義を考察していくことは大いに価値のある作業であったことは間違いない。しかし、後年になって彼の業績をまとめあげ、そのコレクションをアーカイブおよび展示に利用するとなった場合には先駆者であることが逆にネックとなってくる場合も考えられる。

彼自身が収集した新聞類であるが、必ずしも包括的な収集活動ではない。もちろん彼自身が「古新聞も安くは買えなかった」（小野 [5], pp99）が述べているように金銭的な問題も指摘できよう。小野は大正12（1923）年、昭和3（1928）年に洋行しているが、その際、収集したと思われる海外の新聞も小野秀雄関連資料には存在する。例えば「Daily Mirror」は5号から7号という一部のみ、「DAILY EXPRESS」や「THE BRITISH WORKER」も昭和1（1926）年に全て集中していたりするなど収集された資料の年代が偏向している。包括的な収集に至らないのは戦後も同様であり、昭和40（1965）年に熊本県で開催された第8回全国学校新聞指導者講習会全国新聞教育研究大会に参加した際、地元の出水中学校が発行している「出水中学新聞」第97号、白川中学校発行の「白光」第100号といった新聞を収集しているが、その後、学校新聞を包括的に収集している様子は見られない。つまり彼自身はコレクターであってもマニア等へ至っていない点を指摘することができる。

次に彼自身の研究スタイルについてであるが、既述のように新聞収集からその歴史的意義の考察というのが基本的な彼の研究スタイルである。例えば前近代における情報のあり方や、いわゆる新聞が登場する以前の情報発信・受信についても彼は資料収集を行っていた。「維新史料異国太平記」や「御免御触書集覧」といった写本類を入手している。しかし、入手できない資料に関しては彼自身が直接アクセスするのではなく、弟子や知人に依頼をして資料閲覧・翻刻を依頼していた様子がうかがえる。久住博氏の書簡をみると「別段風説書」を久住氏自身が長崎図書館に向き、資料を閲覧し、翻刻したものを送っている。同様のケースは板沢武雄氏に「和蘭風説書」研究に着手するよう依頼していたという小野自身の記述や（小野 [6], pp94）、「鶏助集夏南破男志調査報告1」という平井隆太郎氏の名前が記載されている資料翻刻ノートが所蔵されていることから垣間見られる。

このように彼自身の研究スタイルが資料収集に依拠していたこと自体に関する先駆者としての学術的な意義は大い

に存在する。しかし逆説的にそれを展示に生かすとなった場合、多くの問題が生じる。一つは彼自身が収集した資料のほとんどが平面的であり、立体的な展示物がほとんどないという点である。もう一つとしては彼自身が若い頃に出版した雑誌『日本一』やドイツ語の翻訳書や論文などに関してはほとんど所蔵していないという点が指摘できる。彼自身の足跡をたどることは収集物に大きく依拠せざるをえない。

4. コレクターとしての小野、研究者としての小野

既述のような小野自身の研究スタイルは、根源的には彼自身がコレクターか研究者か、というどちらかに大きく依拠した上での行動であるのか、もしくはこのような対立すら検討すべき点ではないのかという点に行きつく。既に指摘されているように前近代において様々な物品を収集し、それを閲覧し合うという文化は存在した(表 [6])。その後の近代化の過程の中で、学問と好事家という問題は時に未分化でありながら、時に強く意識されてきた(中井 [7])。

このようななかで、小野自身は新聞学を志す最初の契機はドイツ語で書かれた新聞学に関する理論書を読んだことであった。それを受けて、「新聞が蔑視され、その研究が学界から軽視されていることに憤りを感じていた」(小野 [5], pp84) とし、日本における新聞の歴史研究に着手する。つまり彼自身の研究の発露は歴史研究ではなく、理論研究であり、日本独自の新聞研究を行うために歴史を理解し、独自性を明らかにしようとしたものであった。そのために、彼は既述のように新聞の収集を行ったのである。

前近代における、いわゆる「好古家」は物品の収集、閲覧し、その知の集積が時に研究へと昇華する可能性を含んでいた。しかし、明治初期以降、学問によって差異はあれど、それまで収集し拓本とされていたものが、標本とされるという変化があり(鈴木 [8])、近代学問としての諸研究のスタイルが確立していく。特に小野自身が新聞学を始めるにあたって、理論研究からスタートしている以上は、収集が第一義的な作業ではなく、収集活動は研究を行うための手段でしかない。この点から、小野自身の収集活動はコレクターや古物収集家らの活動と乖離し、さらには逆説的に現在、展示への活用の困難さを浮かび上がらせることになっている。

5. おわりに

以上のように見てきたが、小野秀雄関係資料は新聞研究の祖である小野秀雄自身がコレクターとして活動し、それを学術研究として昇華していった足跡をみることができる非常に貴重な資料群である。しかし、それを学術的意義のみだけで展示公開を行うといった段階になると、彼自身の先駆者であるがゆえの偏向するコレクションや若かりし頃の状況が浮かび上がらないといった問題点が出てくる。

つまりコレクター自身がコレクションに個人的な思い入れを意義付けすることは容易であろう。それに対して学術的な意義、社会的な意義を持たせ、第三者からの視線にも耐えうる展示にするためには、いくつかの課題が存在する。

(玉井建也・情報学環特任研究員)

(福重旨乃・情報学環学術支援専門職員)

(添野勉・元情報学環特任助教、現国立民族学博物館外来研究員)

(山村真紀・ミュージアム・サービス研究所 主宰)

<文献>

- [1] 表智之, “マンガはなぜミュージアムを必要としたか”. マンガとミュージアムが会合するとき. 表智之・金澤韻・村田麻里子. 臨川書店. 2009.
- [2] 玉井建也, 吉田正高, “大井第一小学校寄贈漫画および児童文学資料について”. 東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センターニュース. Vol 21. 2011.
- [3] 木下直之, 吉見俊哉編, “ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界”. 東京大学総合研究博物館, 1999.
- [4] 小野秀雄, “かわら版物語: 江戸時代マスコミの歴史”, 雄山閣出版, 1960.
- [5] 小野秀雄, “新聞研究五十年”, 毎日新聞社, 1971.
- [6] 表智之, “〈歴史〉の読出し／〈歴史〉の受肉化”, 江戸の思想. 7号, 1997.
- [7] 中井淳史, “集古の伝統 尚古系譜 日本歴史考古学の近代”, 日本語・日本文化, 31号, 2005.
- [8] 鈴木廣之, 好古家たちの19世紀 幕末明治における《物》のアルケオロジー, 吉川弘文館, 2003.

セ ン タ ー 情 報

■社会情報研究資料センター長

平成 23 年度 情報学環学際情報学府 山 本 博 文

■社会情報研究資料センター運営委員会委員

平成 23 年度の委員の方々です。

山 本 博 文 (委員長 史料編集所・情報学環学際情報学府)

丹 羽 美 之 (副委員長 情報学環学際情報学府)

吉 見 俊 哉 (情報学環学際情報学府)

中 野 公 彦 (生産技術研究所・情報学環学際情報学府)

林 香 里 (情報学環学際情報学府)

西 兼 志 (情報学環学際情報学府)

金 成 玫 (情報学環学際情報学府)

■データベース、新聞（原紙）の購入中止について

社会情報研究資料センターで契約し、学内の利用に供していましたが下記のデータベースと原紙を平成 24 年度から購入中止いたします。

データベース

- ・ Proquest Historical Newspapers (Los Angeles Times (1881-1988), The Washington Post (1877-1995), The New York Times (1851-2008))
- ・ American Film Scripts
- ・ Film Indexes Online(American Film Institute Catalog, FIAF International Index to Film Periodicals Plus, Film Index International)
- ・ The Times Digital Archive 1785-1985
- ・ 日経テレコン 21

原紙

- ・ Kurier
- ・ The Australian
- ・ Die Tageszeitung
- ・ Arab News

東京大学大学院情報学環
社会情報研究資料センターニュース
第 22 号

発 行 日 2012. 3. 30 発行
編集・発行 東京大学大学院情報学環
東京都文京区本郷 7-3-1 TEL 5841-5905
印 刷 三鈴印刷株式会社
東京都千代田区神田神保町 2-32-1 TEL 5276-0811
E-mail tosy@iii.u-tokyo.ac.jp
ホームページ <http://www.center.iii.u-tokyo.ac.jp>